

# So~JA\*E~JA

\*消費者×生産者×地域×JAをつなぐコミュニティ紙\*

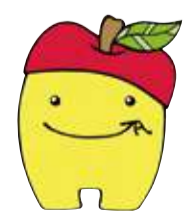


黄金の郷から  
心をつめて〜

いわて平泉の  
りんご真っ盛り!!

10月上旬が旬の「恋ふじ」

11月に旬を迎える「青林」



JAIわて平泉 マスコットキャラクター このみん

一関市と平泉町で栽培している「青林」と「恋ふじ」は、JAIわて平泉のオリジナルリンゴです。青林は、一関市花泉町で1976年に育成された品種で、蜜が入り特有の香りと濃厚な甘み特徴で11月に旬を迎えます。恋ふじは10月上旬頃に旬を迎え、一関市大東町でふじの枝変わりとして発見され2008年に商標登録された甘くてみずみずしさが特徴のリンゴです。JA管内では12月初旬までリンゴの収穫が行われ、旬のリンゴを皆さまへお届けします。



いわて平泉 農業協同組合  
〒021-0027 岩手県一関市竹山町7-1 ☎0191-23-3006代



## 元気なあいさつと迅速な対応を

JAIわて平泉 花泉支店 菅原 清弘 さん(23)

今年JAに入組した菅原清弘さんは、花泉支店で信用窓口の担当として入出金や税金の払い込みなどを担当しています。お客様を元気なあいさつでお迎えし、正確でスムーズな対応を心掛けている清弘さん。お客様をお待たせしないようにと意識するあまり、あせってしまうこともあるそうです。「いつも職場の先輩に助けられています」と感謝しています。早く仕事を覚え周囲に気配りできる職員になりたいと、日々努力を重ねています。休日は、読書をして過ごす清弘さん。「頭が切り替えられ、価値観を高められる」と目を輝かせます。



## 未来を担う JAの笑顔

## スムーズな窓口対応を

JAIわて平泉 千厩支店 伊藤 アリサ さん(18)

千厩支店で信用窓口業務を担当する伊藤アリサさんは、今年JAに入組しました。窓口では、貯金の入出金や各支店間の送金、受け入れなどを担当しています。来店したお客様がどのような用事で来られたのか気軽に声掛けをし、担当窓口へスムーズな誘導ができるよう心掛けています。「分かりやすくアドバイスしてくれる先輩ばかりで安心して仕事をしています」と笑顔で話すアリサさん。「お客様をお待たせしないよう工夫をして業務を進めていきたい」と意欲を見せます。休日は、愛犬の散歩や友達とドライブをして楽しむアリサさんです。



## LET'S COOKING



### ひじきの炊き込みご飯

- ① 米は洗って水(分量外)を加え30分程浸す。芽ヒジキは水で戻し水気を切り、ニンジン(約3錠)の千切りにし、枝豆は塩ゆでしてさやから出す
- ② 炊飯器に①の米を入れ、水、鶏ひき肉、戻した芽ヒジキ、ニンジン、めんつゆを加えて炊飯する
- ③ 炊き上がったら、ざっくり混ぜて枝豆を飾る

(材料) 4人分

米	2合
水	340ml
芽ヒジキ	8g
ニンジン	50g
枝豆	50g
鶏ひき肉	100g
めんつゆ	60ml



野菜ソムリエプロ 木村 千恵美さん



## 大福屋

明治45年に創業し、大福と団子の販売を始めた歴史あるお店です。現在は3代目に受け継がれ、保存料を使わず手作りの味を守り続けています。大福や団子のほか、餅や麺類、季節限定商品などの販売も行います。米は地元の農家から、野菜は産直から仕入れていきます。季節限定(10月中旬頃から3月中旬)のお雑煮は店自慢の味で、地元産のダイコンが出回り始めてから販売を始めるというこだわりぶり。地元のダイコンはうまみと甘みが格別だといえます。他の具も全て地元産でニンジン、曲がりネギ、干しシイタケ、鶏肉もたっぷり入り素材のうまみが体にしみわたります。クリームぜんざい(=写真)は、あつあつのぜんざいと溶けだしたアイスクリームが混ぜり合い絶妙な味わいを楽しめます。手作業で作るため数に限りがあり、無くなり次第その日の販売が終了となりますので、あらかじめの予約がおすすめです。素材本来の味を大切に作られた大福や団子をぜひご賞味ください。



一関市大町6-31 TEL 0191-23-3566  
9:00~17:00(お食事は11:30~16:00)  
不定休



クリームぜんざい 400円(税別)



JAIわて平泉広報誌 **KOSHERU** (こしえる)

組合員向けに発行しておりますJAの広報誌「KOSHERU(こしえる)」は、JAホームページにてご覧いただけます。地元の農畜産物など、盛りだくさんの情報をぜひご覧ください。

https://ja-iwatehiraizumi.or.jp/

## プレゼント!

「So-JA\*E-JA」をお読みになってのご意見・ご感想をお寄せください。お寄せいただいた方の中から抽選で10名様に図書カード(1,000円分)を進呈いたします。なお、当選者はJA広報誌「こしえる」1月号にて発表いたします。

応募方法  
官製はがきまたはメールにてご意見・ご感想と、住所・氏名・年齢・連絡先電話番号を明記の上、下記宛先までご応募ください。

応募締め切り 令和元年11月末

〒021-0027 一関市竹山町7-1 JAIわて平泉 総合企画課  
E-mail:kosheru@ja-iwatehiraizumi.or.jp

## 麺類をご注文のお客様 だんご1本サービス

大福屋  
一関市大町6-31 TEL 0191-23-3566

※1枚につき、1名様まで、1回限り有効です。  
※このクーポンは料理注文時にお渡しいたします。  
有効期限/2019年11月末まで  
□このクーポンは自分で切り取ってからの使用はできません。  
□本券は、換金できません。  
□諸般の事情により、クーポン券の利用ができなくなる場合がありますので、あらかじめご了承ください。

JAIわて平泉 So-JA\*E-JA

# 第44回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画コンクール

～JAいわて平泉審査会～

審査結果



JAグループは「みんなのよい食プロジェクト」の一環として、「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールを実施しています。これからの食・農を担う次世代の子どもたちに、お米・ごはん食、稲作など、日本の食卓と国土を豊かに作り上げてきた稲作農業全般についての学びを深めてもらうことが狙いです。

子どもたちが、毎日のごはんでおいしかったことや家族とのコミュニケーション、お米に関しての思い出や考えたことなどを素直な気持ちで自由に表現しています。

今回は、JAいわて平泉管内で応募のあった作品の中から入賞作品と受賞者の皆さんをご紹介します。

作文部門  
最優秀賞  
小学生の部

## 日本人とお米

一関市立藤沢小学校 4年 玉澤 歩風 乃 さん



この作文を書いて、日本人にとってどれほどお米が大切かを考えることができました。読んでくれた人にもお米の大切さが伝わらうと思います。

わたしの朝ごはんには、だいたい白いごはんが出てきます。だから、ごはんはあきてしまうことがあります。毎日パンを出してほしいと思う時もあります。ですが、本当にお米が無くなったなら、どうなるでしょうか。考えてみました。お米が無かったら、わたしの大好きな、おにぎり、パエリア、きりたんぽ、白玉が食べられなくなってしまいます。こういうことを考えていたら泣きそう、かなしくなりました。他にも色々考えてみると、お米の大切さを知ることができました。お医者さんのドラマで、主人公がこんなセリフを何度も言っていました。「知ってるか、人は米でできているんだぞ」と言っていて、いつもたまごかけごはんを食べていました。実は、お米を食べなくても死なないだろうし、お米を主食としない国の人たちは、お米がなくても平気だと思えます。でも、小さな時からお米を食べて育ったわたしは日本人は、ずっとお米を食べないでいたら、食べなくなるのだと思います。

あります。おみやげにもらってうれいのは、レトルトパックの白いごはんなんです。外国にもお米はあるようですが、日本のお米と比べると、日本で作ったお米が食べなくなるそうです。パンやじゃがいも、パスタなど、お米の他にもわたしの好きで主食になる物はたくさんあります。それでも、わたしは毎日お米以外の物を食べていたら、日本のお米が食べなくなるのかなと思いました。この作文を書いて、自分にとってお米がどれだけ大切な物かを知ることができました。お米のありがたさに感じやして、毎日ごはんが美味しいと、お米が食べられることを祈ります。もうすぐお米のしゅうかくの秋になります。わたしの家の周りにも、たくさんのお米の田んぼがあります。今年もたくさん、おいしくお米がとれますように。

作文部門  
最優秀賞  
中学生の部

## 私の食べたいお米

一関市立花泉中学校 1年 阿部 風花 さん



私の書いた作文が入賞すると思っていなかったのですが、とてもうれいので、これからもおいしいお米をたくさん食べていきたいです。

私の家では、4年前まで米づくりをしていた。だが、4年前の9月に祖父が亡くなってからは、機械を動かせる人がいなくなったため、今は、近所の人が私の家を使っていた田んぼを使って作ったお米を家で食べている。祖父が亡くなった1年後には田植え機や、稲刈り、その他の機械はほとんどなくなりました。祖父が亡くなって、米づくりをしなくなってからある疑問が生まれた。それは、米づくりなどをしている人達が減っていくとどうなるのかというものだ。そう考えた理由は、祖父が亡くなる前は、よく近所の人や親せきなどに米を分けていたのだが、今は、少しの人にしか分けられなくなりました。米づくり農家が減るたびに、お米を食べる人としても海外から輸入したお米になると思ったから。私はさつそくインターネットを使って、米づくり農家が減るとどうなるのかを調べた。そうすると、2つのが分かった。まず、1つ目は、日本でのお米の生産額が減ることだ。1994年に3.8兆円だった生産額が、2014年には約3分の1の1.4兆円になったそうだ。生産額が減ったということは、生産量も減ることになる。だから、食べられる量も減るのではないかと考えた。2つ目は、中山間地域に

おいて、耕作放棄地が増大することだ。日本でもつくられたお米が食べられなくなるのはとても無理がある。しかし、これを解決するための対策がある。たとえば、それぞれの地域の人々がグループを作り、一緒に農業をする。「集落営農」にしたり、さらには、会社のように組織化して農業をする「法人化」がある。集落営農は後継者不足を解決するためにも利用されている。ほかにも、調べればもっとたくさん分かることがあると思うが、私は今できることをできるだけやって、米づくり農家の減りを防ぐことができればいいなと思った。これを踏まえて、私は将来、この地域の米づくりをさらに盛んにできるように仕事につきたい。そして、この地域の米づくりをさらに盛り上げたい。しかし、私には、小さいことしかできないかもしれない。だが、私一人から少しずつこの地域の人の心に広がっていけば、米づくり農家の減少や他の米づくりの問題を少しずつ解決できると思う。私の食べたいのは、輸入したお米ではなく、私の住んでいる地域の人がつくった心こもったお米。だから、これからもこの地域のお米を大切に食べていきたい。

## お米を流さないようにしているお米とぎ

一関市立滝沢小学校 3年 千葉 心遙 さん



ママとお米をいれているところを描きました。といた水を流す手を強調して描きました。自分でといたお米はおいしかったです。



みんな上手に描けたね!

図画部門  
最優秀賞  
小学生の部

## バケツ稲の観察

一関市立眞田中学校 2年 佐藤 瑞実 さん



技術の授業でバケツ稲の栽培に取り組んだ時に感じた「バケツの中で育つ稲のたくましさ」「農家の方の大変さ」「お腹いっぱいにごはんを食べられる幸せ」などを思い出しながら作品を描きました。

図画部門  
最優秀賞  
中学生の部

図画部門  
優秀賞  
小学生の部



一関市立舞川小学校 2年 千葉 紗也 さん



私が描いたのは、学校でおにぎりを食べる友達です。おいしく食べている様子を伝えようと、ほったたにご飯粒をつけました。

図画部門  
優良賞  
小学生の部



平泉町立平泉小学校 4年 熊谷 慶吾 さん



ぼくの好きだから揚げを食べているところを、お母さんがとってくれた写真を見ながら描きました。人物を描くのが難しかったです。

図画部門  
優良賞  
中学生の部

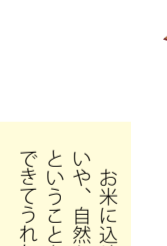


一関市立眞田中学校 2年 及川 小春 さん



私は食べるのが好きなので、ごはん支度の様子を描きました。母が、私の好きなちらし寿司を作っているところです。のちらし寿司は、私が半分以上おいしくいただきました。

図画部門  
優良賞  
中学生の部



一関市立荏荏中学校 3年 佐藤 颯夏 さん



お米に込められたたくさんの人の思いや、自然からの恵みが詰まっている、ということを表現した作品です。入賞できてうれいでした。

## 心をこめて作ったごはん

作文部門  
優秀賞  
小学生の部  
一関市立舞川小学校 3年 芦萱 陽菜 さん



おいしいお米を毎日食べられるのは、農家の人たちが一生懸命に作ってくれているおかげです。感謝の気持ちを込めて書きました。入賞できてうれいかったです。

## お米と家族

作文部門  
優秀賞  
中学生の部  
一関市立花泉中学校 3年 熊谷 琉衣 さん



優秀賞をいただきうれいと思います。この作品にはお米と家族を大切にしたいという気持ちを込めました。祖父の思いを受け継ぎ、お米を大切にしていきたいです。

## 米という名の宝

作文部門  
優良賞  
中学生の部  
一関市立花泉中学校 2年 千葉 亜柚奈 さん



私はこの作品に祖父との思い出を書きました。きつと天国の祖父も喜んでいると思います。この作品を書いてみて、私にとってお米がどんな存在か改めて分かりました。

両校は、第44回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクール応募において、積極的に取り組み、多くの作品を出品していただきました。

図画部門 一関市立舞川小学校  
作文部門 一関市立花泉中学校

審査講評

図画審査員  
アートセンターキューブ 代表  
一関工業高等専門学校 非常勤講師  
及川 武芳 氏

昨年、JAいわて平泉から県・全国で入賞するという素晴らしい成果を残しました。特に全国文部科学大臣賞に輝いた、眞田中学校の佐藤瑞実さんの作品は絶賛されるものです。今年も子どもたちのまじめに取り組む姿勢や創意工夫している作品に

感心させられました。今回最優秀賞に選ばれた作品は、感性が光ります。状況をよく観察し表現しています。この調子で絵を楽しんでください。感性豊かな作品に感激するとともに、忙しい中応募いただいた先生方に感謝いたします。

審査講評

作文審査員  
若手日新聞社 編集局次長  
伊藤 正幸 氏

日本人の主食はお米です。普段何気なく食べていますが、毎日おいしいお米を食べることができるのは農家の人たちが田んぼで一生懸命に育ててくれたおかげです。小学生の作文はどれもお米の大切さや農家の人々への感謝の思いがこもった作品でした。中学生の作文は、

生産者の高齢化や耕作放棄地の問題などにも触れ、農業や農村の将来について考え、自分にできることに取り組もうとする姿勢も伝わってきました。これからもいっぱいお米を食べて勉強やスポーツに充実した日々を送ってほしいと思います。